川井市長の せせらぎトーク

■ビチェンツァにて■

新年の挨拶で国交省関係の皆さんから、デダロ・ミノス賞受賞のお祝いの言葉。松木副知事や同行した経営者協会の西井さん、長島県議らはアナーニを絶賛し、白石は素晴らしい市に交流の相手に選ばれたと言う。別にこっちが手を挙げたという訳じゃない。向こうが選んでくれたんだと言いたいところだ。そこで辛口の話しを三つ。

一　世界遺産と焼き栗

十二月十日再びイタリアへ向かう。

イタリアで一番旨かったのは、焼き栗である。舞台が良かった。デダロ・ミノス賞授賞式後のパーティーは、共に世界遺産のバシリカと市庁舎をつなぐ天の川のような電燈を夜空に見ながら、ろうそくの光に照らし出されるバシリカの回廊で行われた。黒いドレスの美女とワイン片手に焼きたての栗をつまむ。夢、まぼろしの世界である。

「イタ飯」とか称してイタリア料理が日本では全盛であるが、考えてみればピザだけで腹一杯になって喜んでいる。でも、ピザはイタリアでは単なるオードブルにすぎない。あのイタリア料理のボリュームを見てからモノを言いなさい。

二　ホイプルウィーン市長とのすれ違い

デダロ・ミノス賞の授賞式は古い市庁舎で行われた。ビチェンツァ市長エンリコ・ヒュルウィックさんのご厚意で、市庁舎の中にある普段人が入れない広間（ユネスコ遺産）で、授賞式の前、四時半から私と、ウィーン市長ホイプルさん、ベネトンの会長、さらに三人の設計家で小パーティーを持ち、そこで名誉市民のバッチの授与のセレモニーがある予定であったという。

ところが、そこがイタリア。ホテルでいくら待っても迎えが来ない。ベンツで迎えが来るからと言われて、ホイホイ待っていたこちらもうかつだった。特別賞のお二人はおいでになっていたが、グランプリの私達が行かないので、市長室での小パーティーはお流れ。名誉市民のバッチは三人とも授賞式でもらったが、ウィーン市長は所用があってパーティーは欠席。白石市のまちづくりの模範としていた、ウィーンの市長と話ができなかったのは、何とも残念だった。前もって予定を知らされていれば、タクシーを呼んででも駆けつけたものを。

それにしてもイタリアのノンビリさよ。

三　置き引き

帰りのミラノの空港でのこと。随行したH君が、航空券を換えて来ますからと出かけたので、長椅子に一人腰掛け、足元に彼のバック、右脇に私のバック、その上にコートを乗せて待っていた。すぐに一人の男が、私の荷物の右側に腰掛けた。暫くすると、左側にもう一人の男が来て、「ミラノ、ミラノ」と大声を掛けてきた。イタリア語が分からないから「ノー、ノー」と答えていたが、ふっと気付くと右脇の荷物がジリ、ジリと動いているような気がした。慌ててコートをはねのけてみると、縦に置いたはずのバックが、もう横を向いている。これはいかんと思いバックを体の脇に引きつけ、その上にしっかりと肘をついたら、右側の男がすっと立って行ってしまった。合わせたように左側の男も立っていく。どう考えても、左側の男に注意をそらせて、右側の男がバックを抱えて逃げる置き引きに違いない。間一髪の所であった。

それにしても、ユダンもスキも無い国である。

みなさんからの素敵な情報を待ってます！

今年も市民の生命と財産を守ります

白石市消防団出初め式

１月５日、ホワイトキューブで白石市消防出初め式が開催されました。

婦人防火クラブの皆さんをはじめとする500人もの観衆が頬もしげに見守る中、625名の消防団員が参加して、今年配備完了したポンプ積載車68台の機械器具点検、市長や来賓による観閲などが整然と行われました。

そして、消防団階子乗り隊の皆さんによるはしご乗りが式典に華を添え、最後は全団員・車両による市内パレードで締めくくりました。

八宮の土で私たちの「白石焼」を

福岡小八宮分校で焼き物作り

昨年11月から今年の１月にかけて、福岡小学校八宮分校の3､4年生12人が、総合的な学習の時間に手づくりの焼き物作りに挑戦しました。

分校近くにお住まいの陶芸家ジョゼ・ファロンバさんの指導のもと、粘土を近くで採取した土から取り出し、窯焼きの燃料も近くの山や学校の倒木などを焼いて作った炭を用いるなど、八宮の豊かな自然をふんだんに利用して湯飲みや茶碗、ぐいのみなどの焼き物を作り上げました。